

口永良部島の火山活動解説資料（令和5年10月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

口永良部島では、火山活動は高まった状態で経過しており、新岳及び古岳の火口周辺において噴火が発生する可能性があります。

古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震は、引き続き多い状態が継続しており、10月下旬頃からさらに増加しています。新岳火口付近で発生している火山性地震はやや多い状態で経過しています。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量もやや多い状態で経過しています。GNSS連続観測では、2023年6月下旬ごろから古岳付近の膨張を示唆する変動が観測されています。

新岳火口及び古岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和5年7月10日に火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・地震や微動の発生状況（図1、図9-②③、図10-④～⑥、図11）

古岳火口付近で発生している火山性地震は、引き続き多い状態で経過しており、10月下旬頃からさらに増加しています。新岳火口付近で発生している火山性地震は、やや多い状態で経過しています。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。火山性地震の月回数は1,219回（9月：587回）で、前月と比べ増加しました。古岳火口付近の火山性地震は1,019回（9月：467回）で、前月より増加しました。また、時折振幅の大きな地震も発生しています。新岳火口付近の火山性地震は200回（9月：119回）で、前月と比べてやや増加しています。

震源が求まった火山性地震は、新岳火口及び古岳火口付近のごく浅いところから深さ1km付近に分布しました。

火山性微動は観測されませんでした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和5年11月分）は令和5年12月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、宇宙航空研究開発機構（JAXA）及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・噴煙など表面現象の状況（図2～図8、図9-①、図10-①②）

新岳火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上400m（9月：400m）まで上がりました。古岳火口では、遠望カメラから噴煙は確認されませんでした（9月：300m）。

17日から19日及び30日から11月1日にかけて島内で実施した現地調査では、古岳火口東側及び新岳火口西側割れ目付近に引き続き地熱域を確認しましたが、温度や広がりや特段の変化は認められませんでした。また、17日に海上自衛隊第1航空群の協力により実施した上空からの観測では、新岳火口及び古岳火口付近から白色の噴煙が火口縁を超えない程度に上がっていることを確認しました。前回（8月15日から18日）の無人航空機による観測と比較して、古岳火口からの噴煙の量は減少していました。その他、新岳火口及び火口周辺に特段の変化は認められませんでした。

・火山ガスの状況（図9-④、図10-③）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、80～300トン（9月：100～400トン）とやや多い状態で推移しました。

・地殻変動の状況（図12、図13）

GNSS連続観測では、2023年6月下旬ごろから古岳付近の膨張を示唆する変動が観測されています。

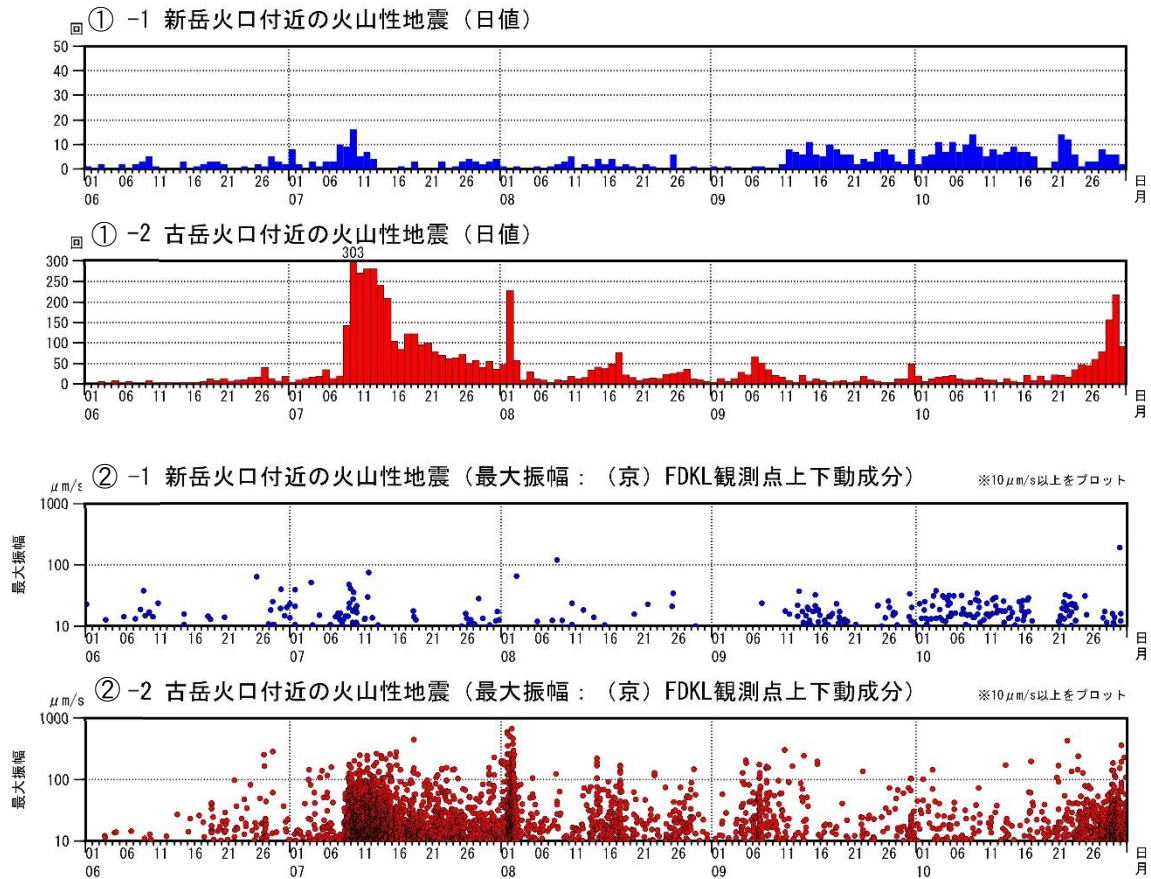


図1 口永良部島 新岳火口付近及び古岳火口付近の火山性地震の日別回数と最大振幅（2023年6月～10月）

- ・古岳火口付近の火山性地震は10月下旬頃からさらに増加しており、引き続き多い状態です。また、振幅の大きな地震も時折発生しています。
- ・新岳火口付近の火山性地震は前月と比べてやや増加しており、やや多い状態です。

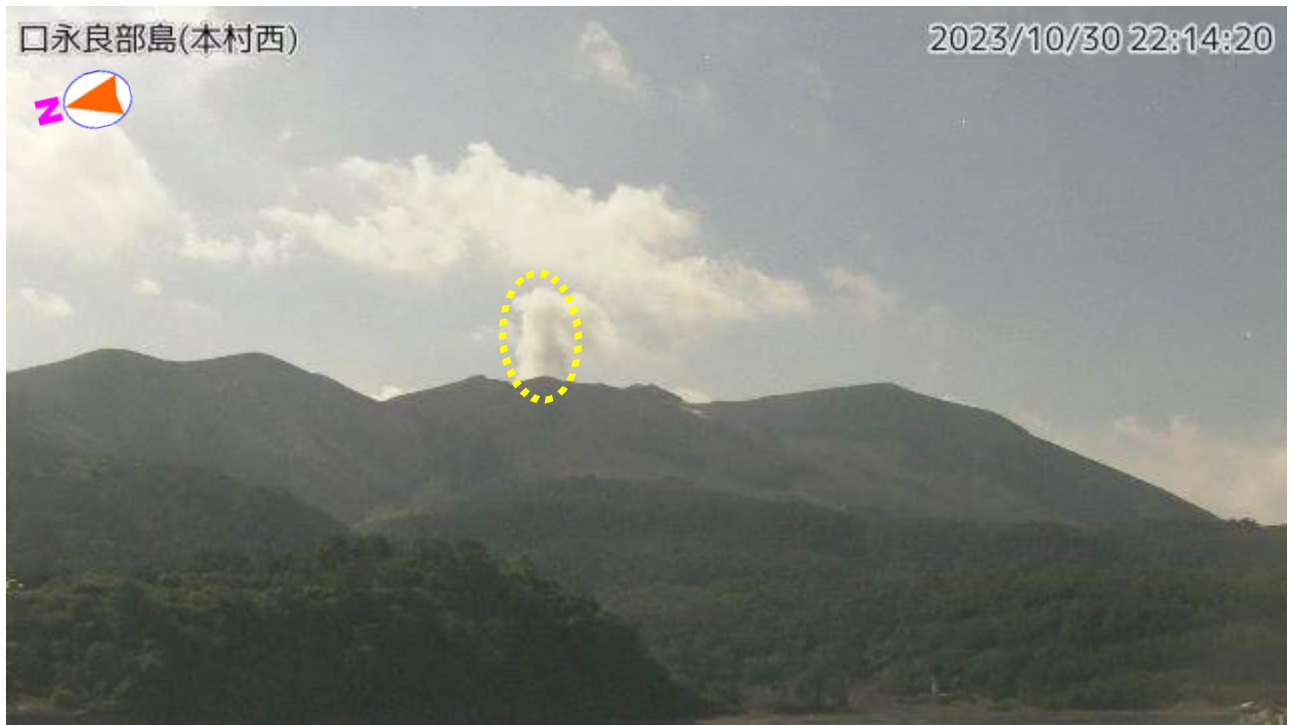


図2 口永良部島 噴煙の状況（10月30日、本村西監視カメラ）

- ・新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上400m（9月：400m）まで上がりました。
- ・古岳では、白色の噴煙は遠望カメラからは確認されませんでした（9月：300m）。

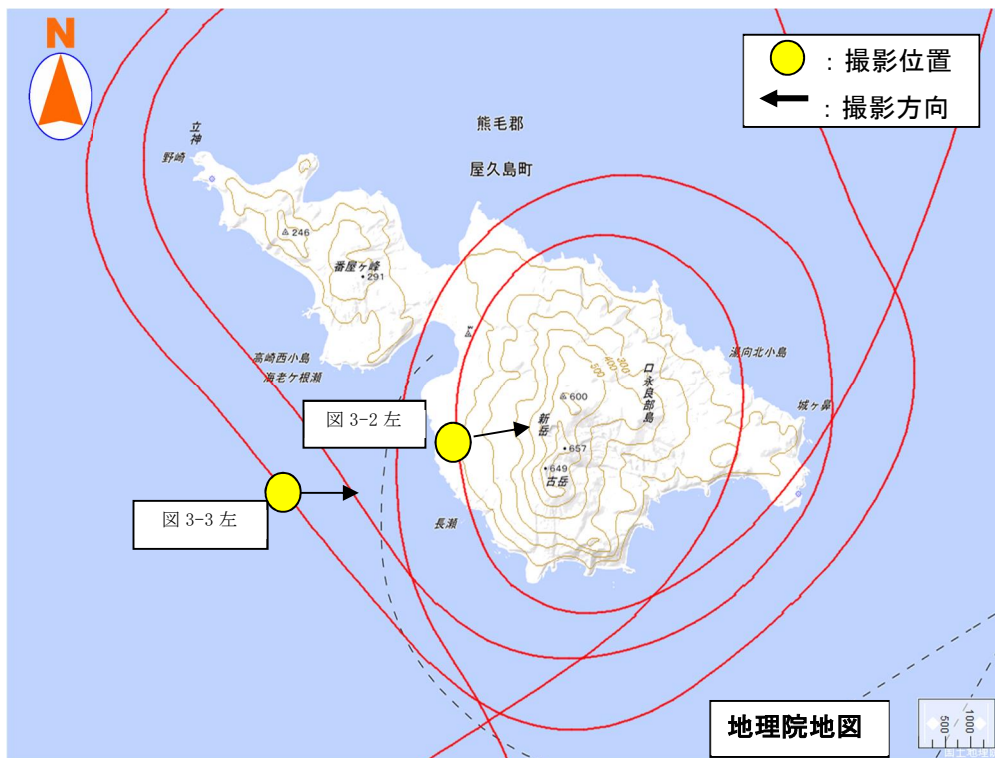


図3-1 口永良部島 機上観測による撮影位置及び撮影方向



図3-2 口永良部島 新岳火口の状況

- ・新岳火口では、火口内で白色の噴煙をわずかに確認しました（黄色破線部分）。火口西側の割れ目付近等、火口以外からの噴気は認められませんでした。
- ・これまでの観測と比較して特段の変化は認められませんでした。



図3-3 口永良部島 古岳火口の状況

古岳火口では、火口内で白色の噴煙を確認しました。8月16日の無人航空機による観測と比較すると、噴煙量は減少していました。

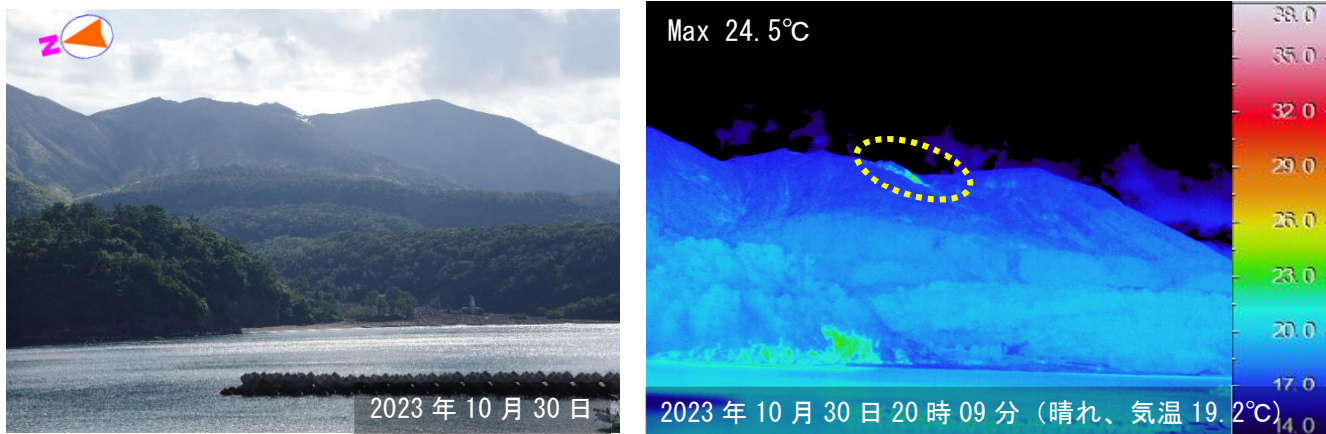


図4 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

- ・17日及び30日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域（黄色破線内）を確認しましたが、地熱域の温度や広がりには特段の変化は認められませんでした。
- ・古岳を確認できる西側の範囲では特段の変化は認められませんでした。

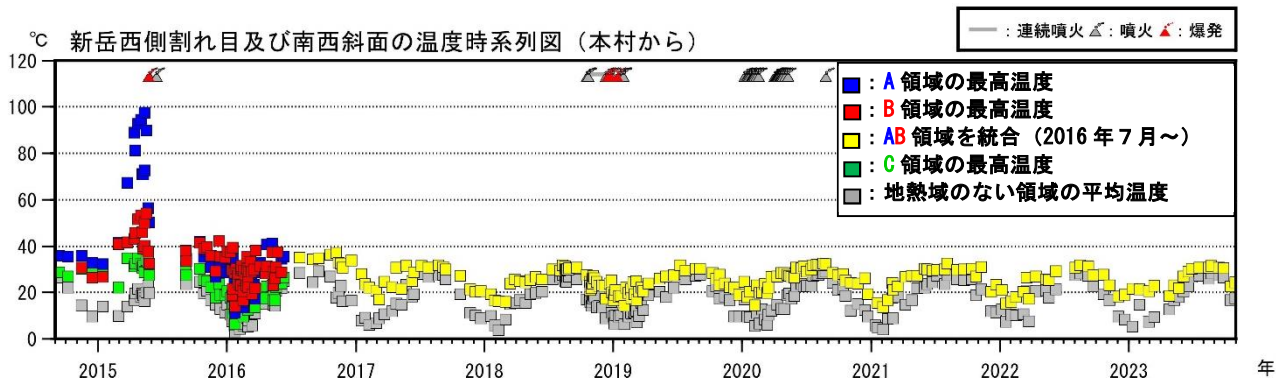
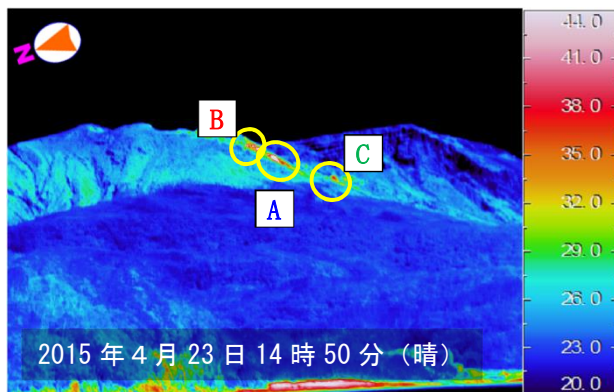


図5 口永良部島 新岳火口西側割れ目付近及び新岳南西側斜面の地熱域の温度時系列
(2014年8月～2023年10月)

赤外熱映像装置による観測では、新岳火口西側割れ目付近（AB領域）の地熱域の温度に特段の変化はありませんでした。

2016年7月よりA領域とB領域を統合しています。
2016年7月以降、C領域で地熱域は観測されていません。

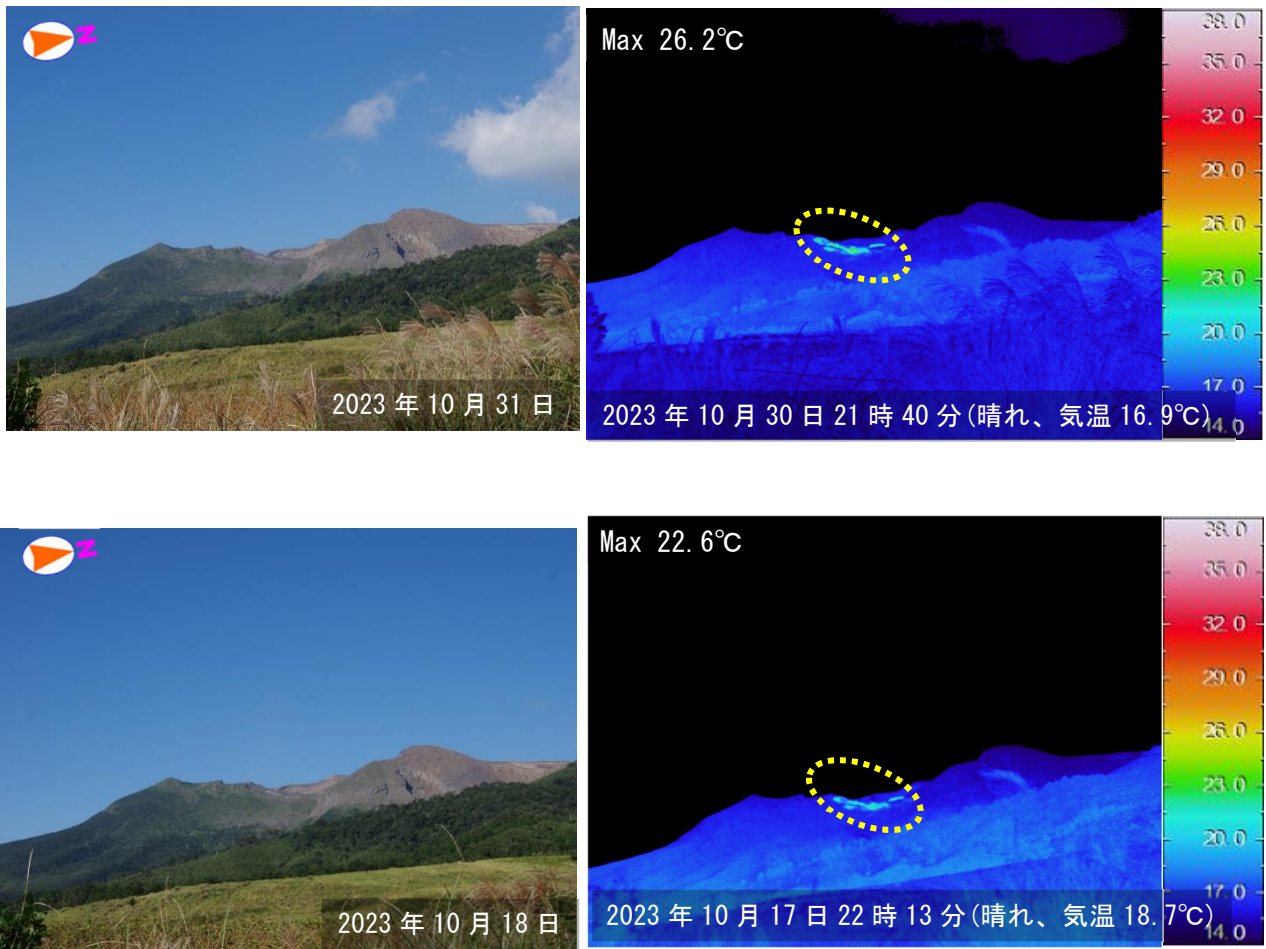


図6 古岳火口東側の地熱域の状況（湯向牧場から観測）

- ・ 17日～18日及び30日～31日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において古岳火口東側の地熱域（黄色破線内）の温度や広がりには特段の変化は認められませんでした。
- ・ 古岳火口で火口縁をわずかに超える白色の噴煙を観測しました。

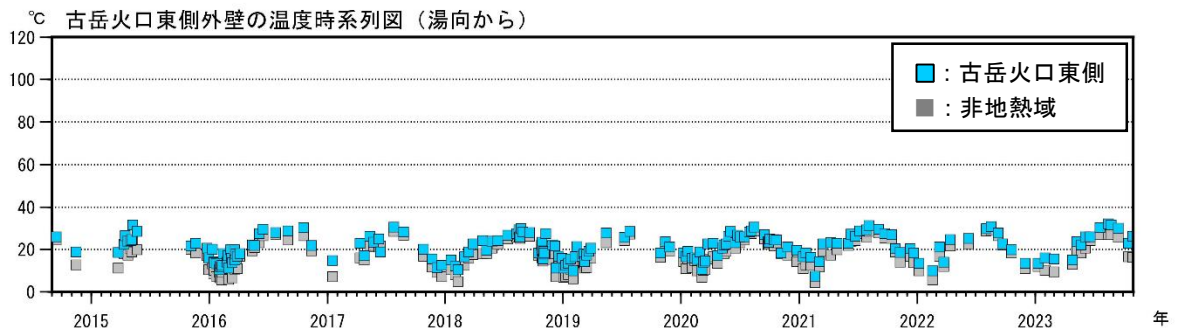


図7 古岳火口東側の地熱域の温度時系列（2014年9月～2023年10月）

古岳火口東側では、地熱域の温度は大きな変化は見られませんでした。

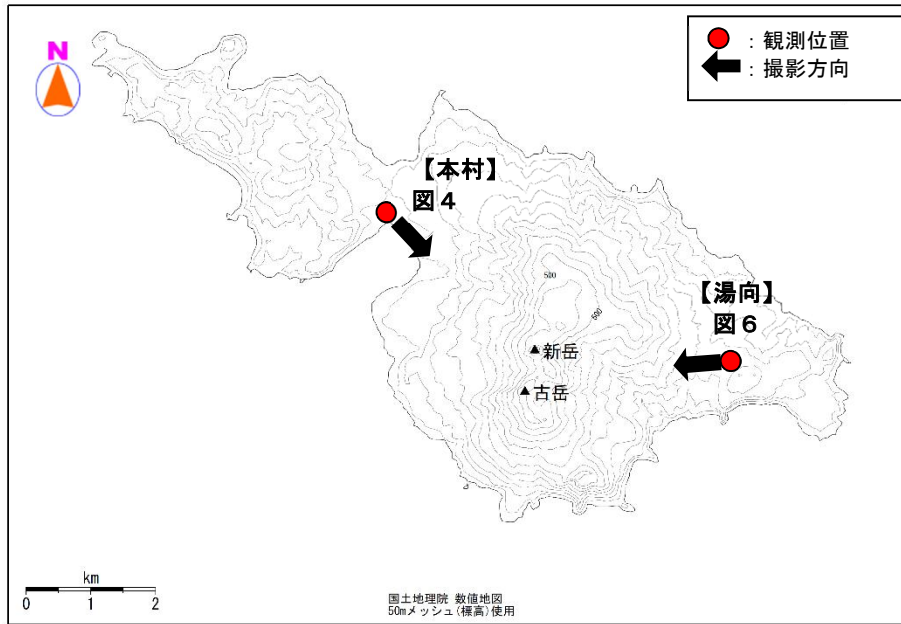


図8 口永良部島 山麓からの観測位置及び撮影方向

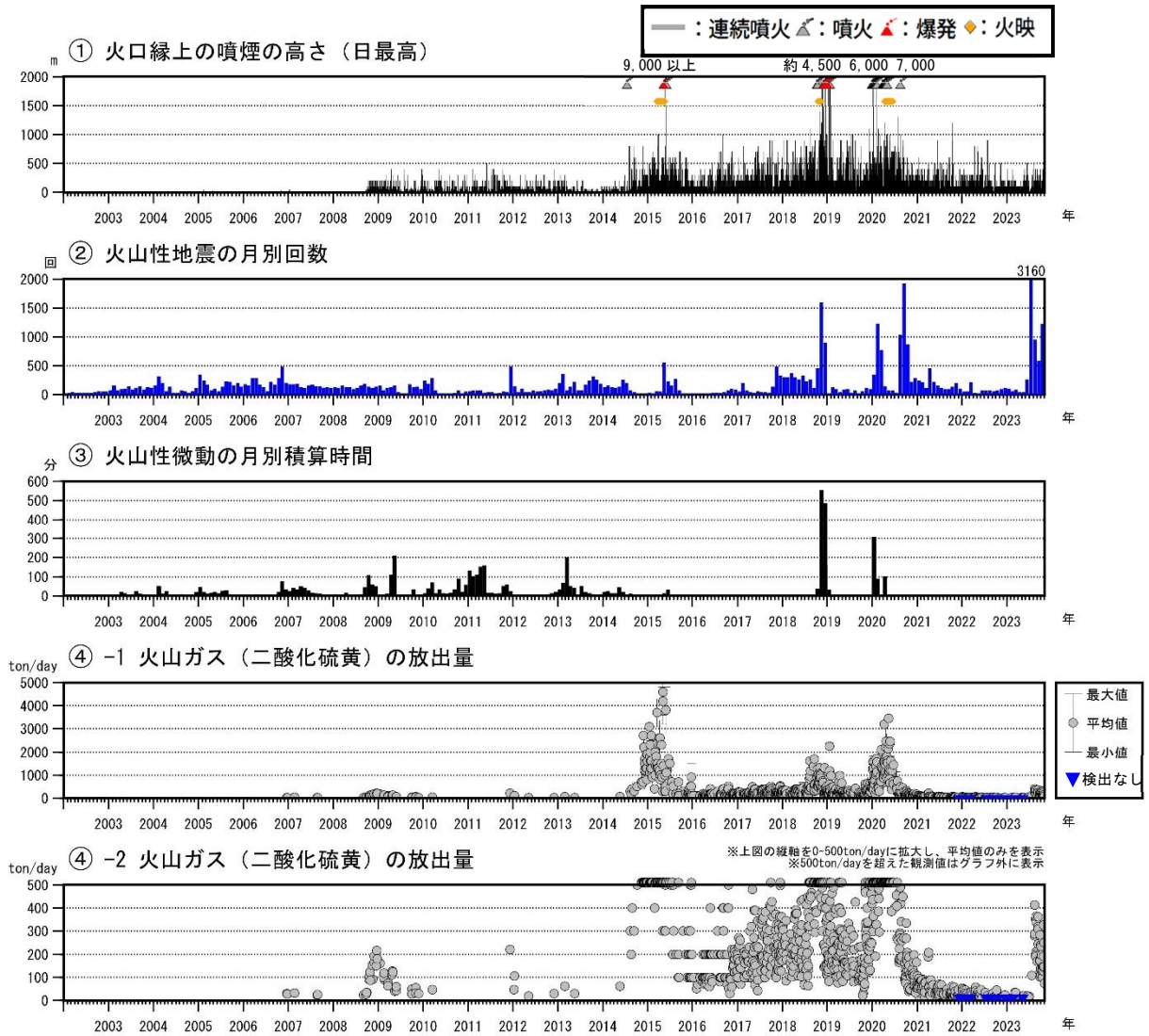


図9 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2023年10月）

火山性地震及び火山性微動は、観測点の稼働状況により、「野池山3（上下動 $8.0\mu\text{m/s}$ ）」「FDKL（上下動 $6.0\mu\text{m/s}$ ）」「新岳西山麓（上下動 $3.0\mu\text{m/s}$ ）」「新岳北東山麓（上下動 $1.0\mu\text{m/s}$ ）」「古岳北（上下動 $6.0\mu\text{m/s}$ ）」「古岳南山麓（上下動 $4.0\mu\text{m/s}$ ）」のいずれかの基準を満たすものを計数しています。

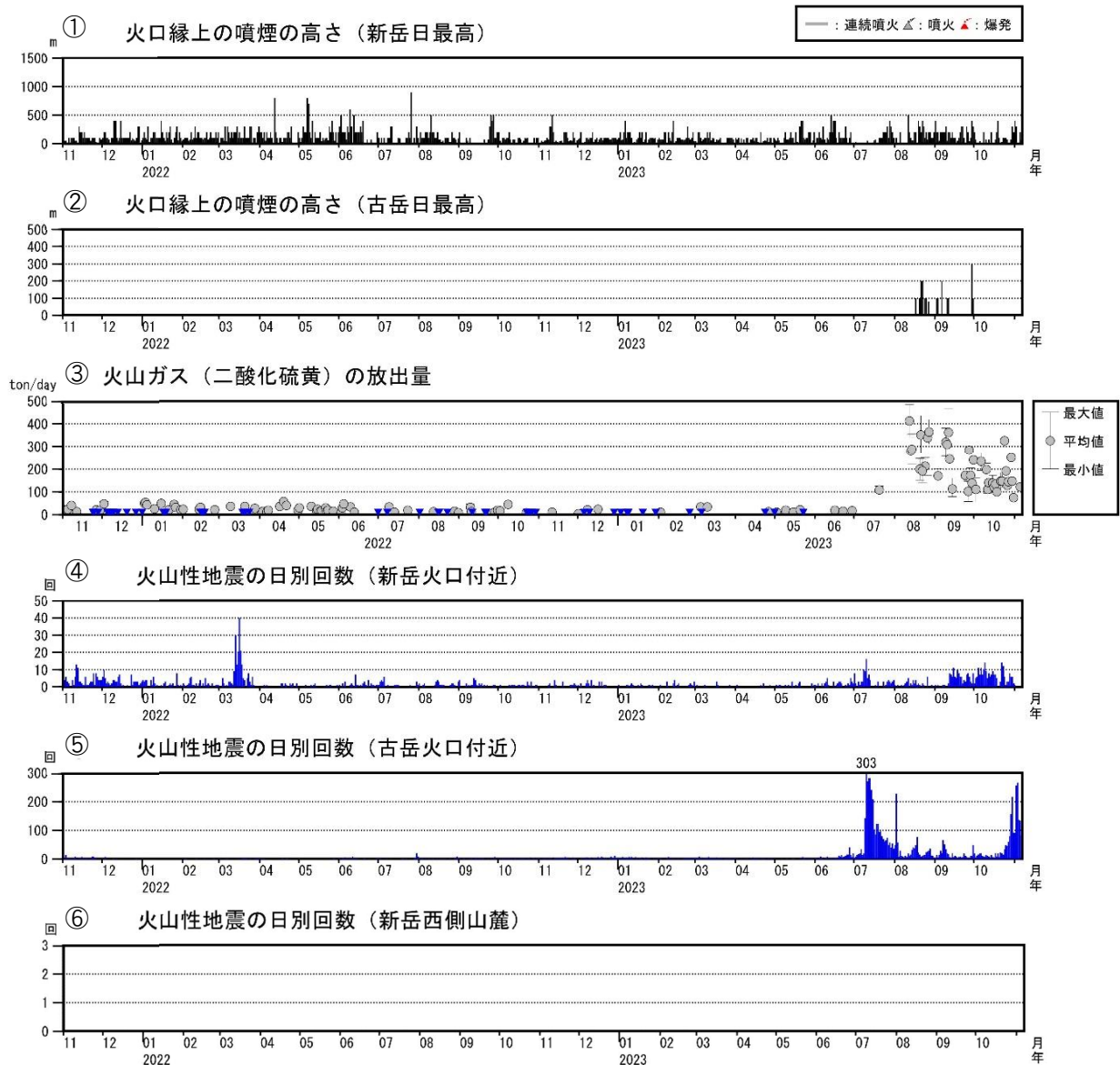
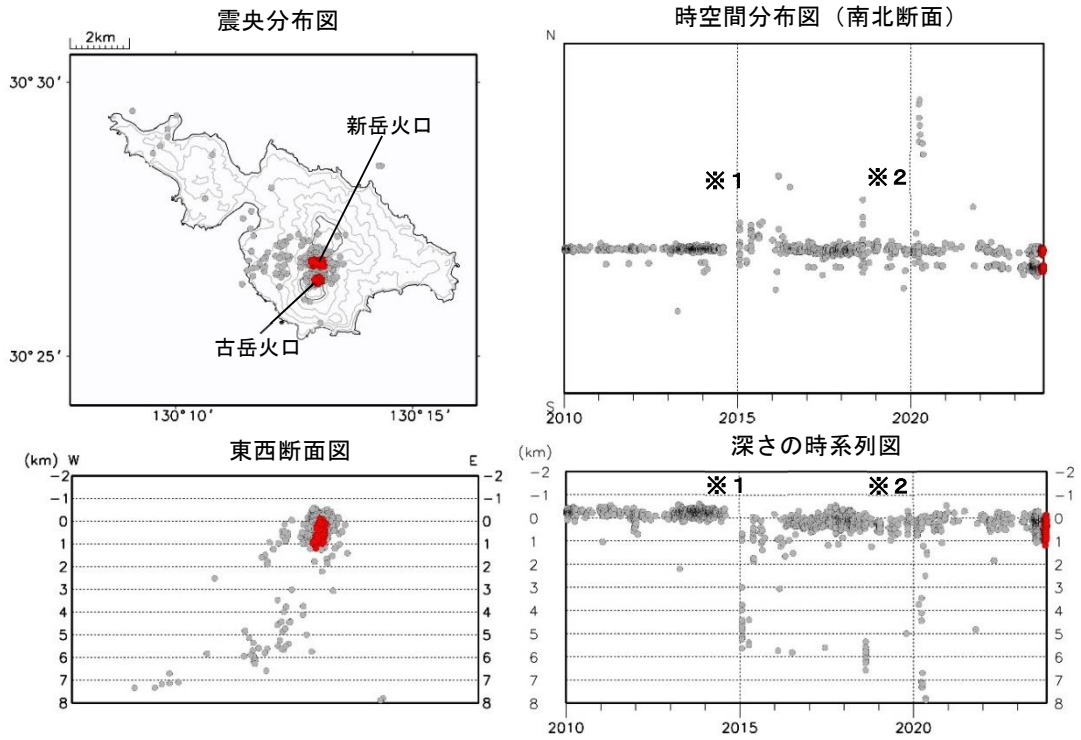


図 10 口永良部島 最近の火山活動経過図（2021年11月～2023年10月）

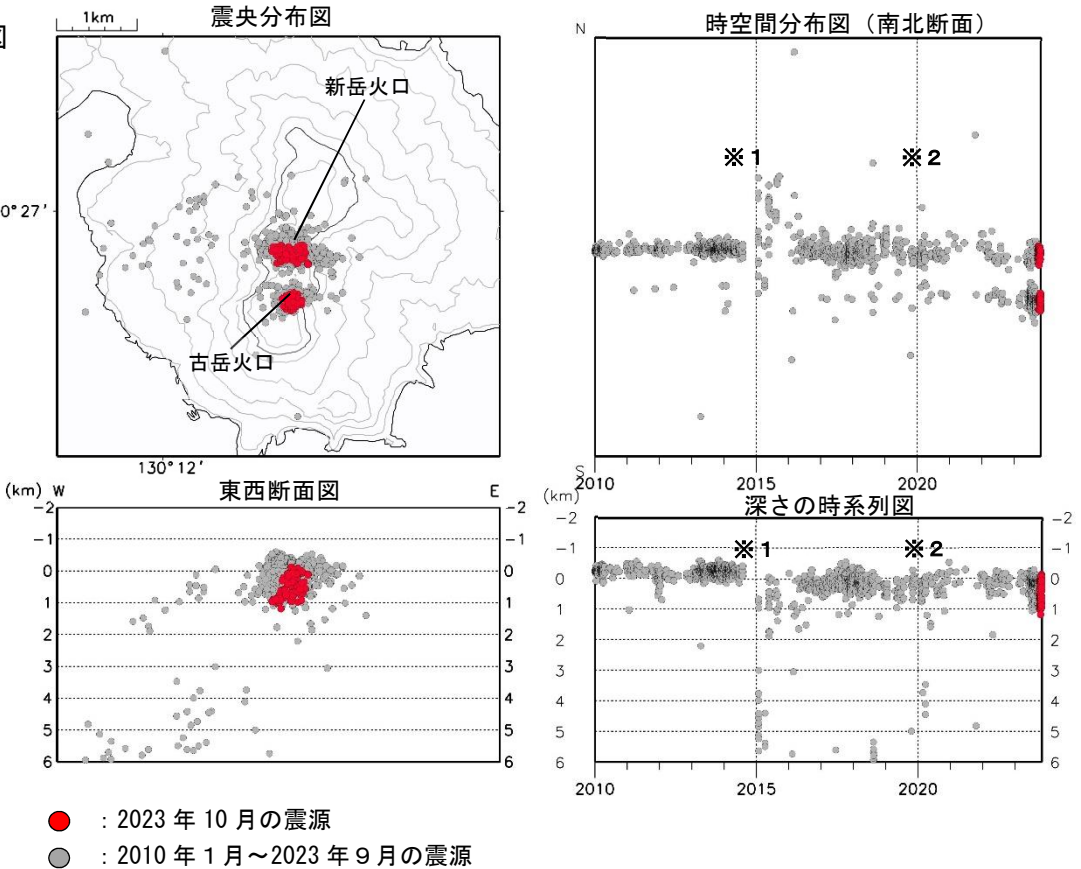
<10月の状況>

- ・新岳火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上 400m（9月：400m）まで上がりました。
- ・古岳火口では、遠望カメラから噴煙は確認されませんでした（9月：300m）。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、80～300トン（9月：100～400トン）とやや多い状態で推移しました。
- ・火山性地震の月回数は1,219回（9月：587回）で、前月と比べ増加しました。古岳火口付近の火山性地震は1,019回（9月：467回）で、10月下旬頃から増加し引き続き多い状態です。新岳火口付近の火山性地震は200回（9月：119回）で、前月と比べてやや増加しています。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。
- ・火山性微動は観測されませんでした。

① 広域図



② 狭域図



● : 2023年10月の震源
 ● : 2010年1月～2023年9月の震源

図11 口永良部島 震源分布図 ①広域図 ②狭域図 (2010年1月～2023年10月)

<10月の状況>

震源が求めた火山性地震は、新岳火口及び古岳火口付近のごく浅いところから深さ1km付近に分布しました。

- ※1 2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2016年5月31日までは検知力や震源の精度が低下しています。
- ※2 2019年1月17日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2019年10月8日までは検知力や震源の精度が低下しています。

その他の期間においても観測点の障害等により、検知力や震源の精度が低下する場合があります。

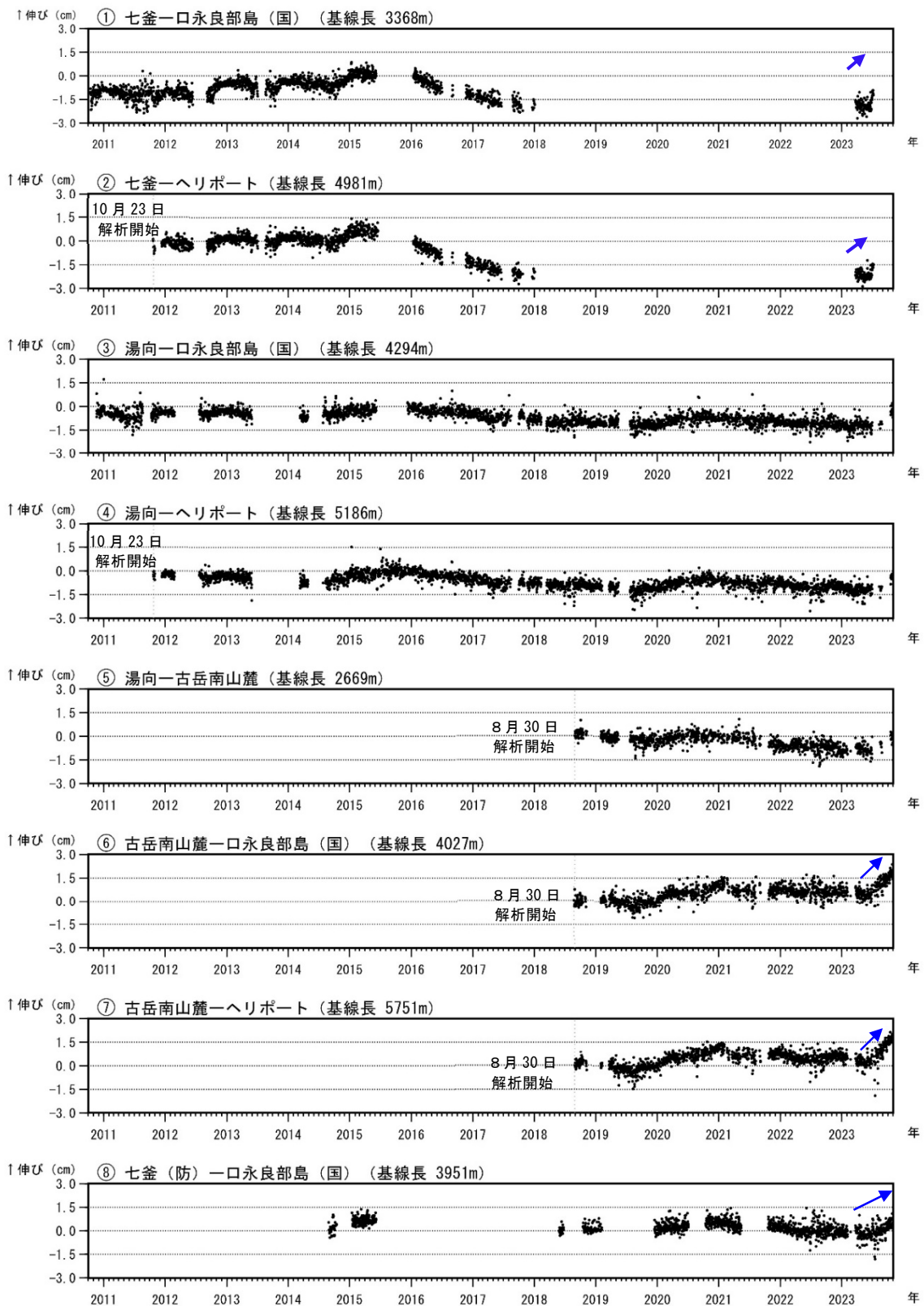


図 12 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010 年 10 月～2023 年 10 月)

GNSS 連続観測では、2023 年 6 月下旬ごろから古岳付近の膨張を示唆する変動が観測されています (青矢印)。

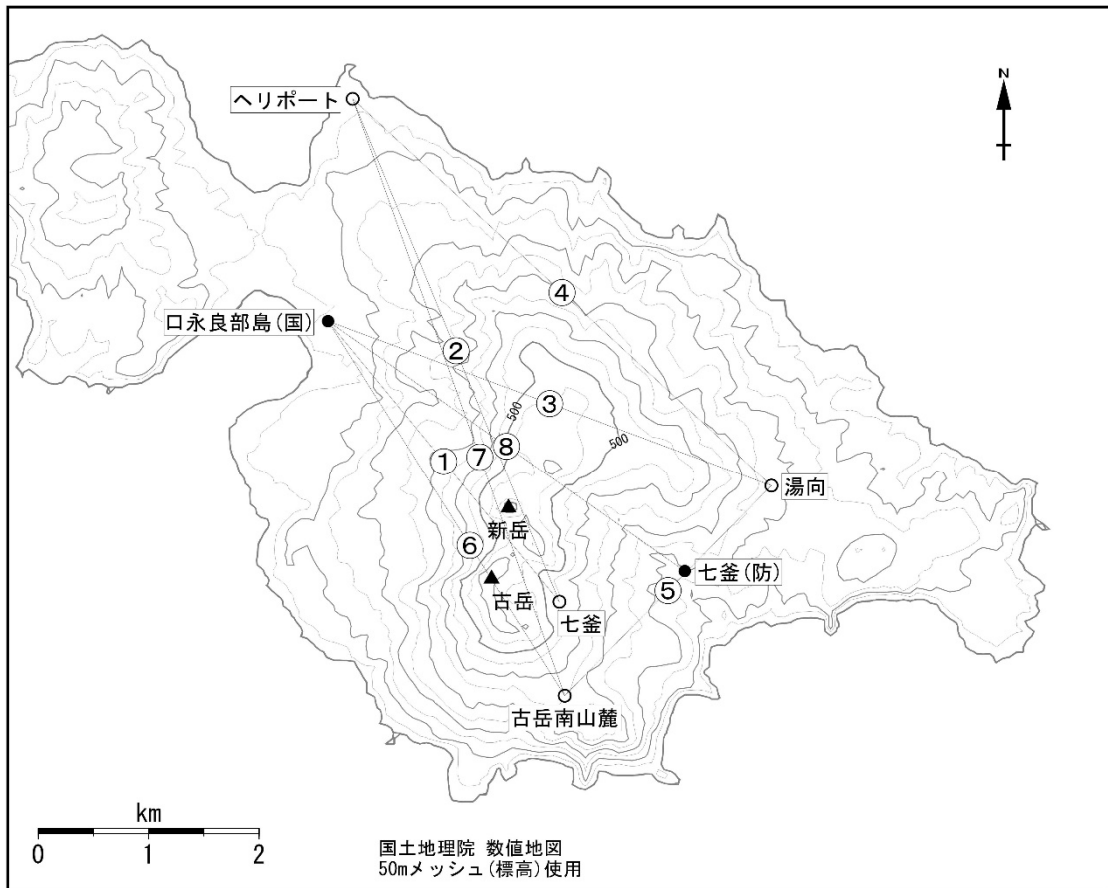
これらの基線は図 13 の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016 年 1 月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

2023 年 3 月 23 日の観測点修繕工事 (七釜観測点) に伴うステップを補正しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院

図 13 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

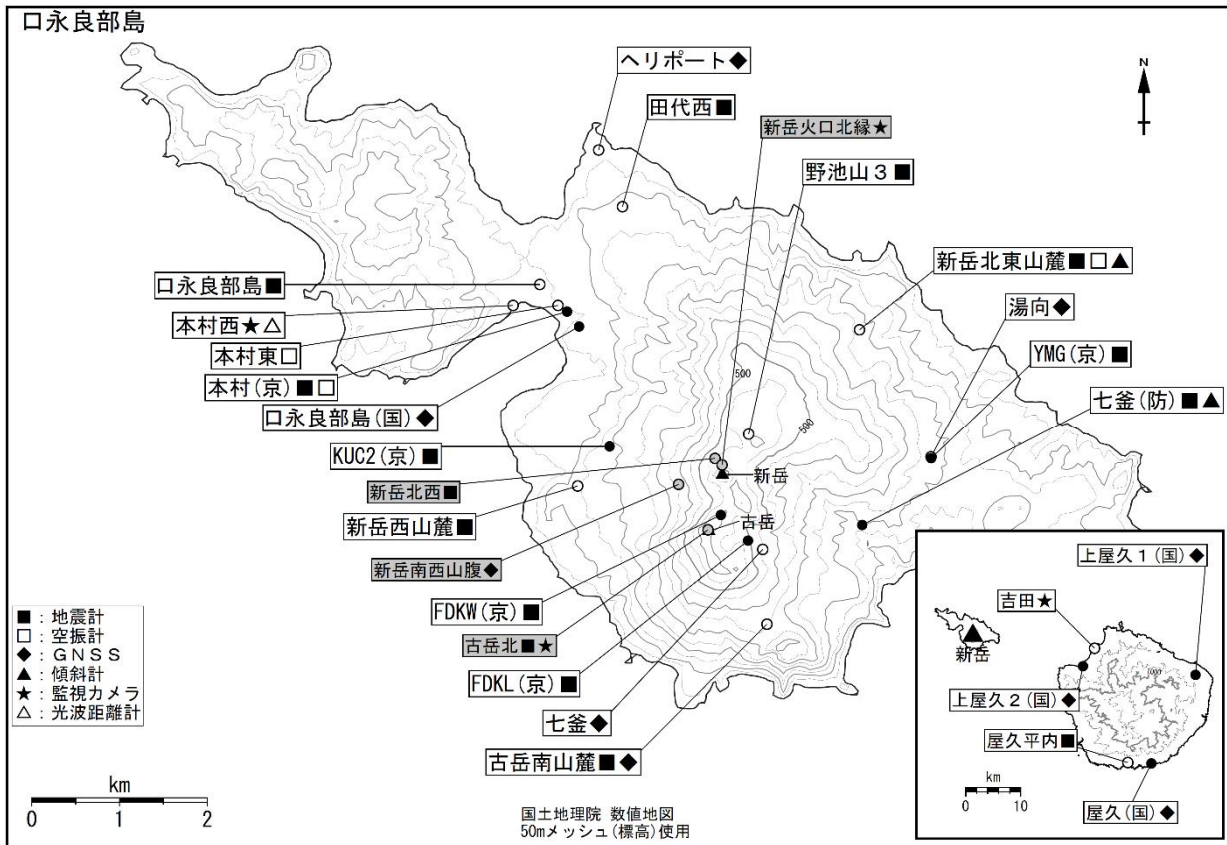


図 14 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国) : 国土地理院、(京) : 京都大学、(防) : 防災科学技術研究所
 図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。